「発生の場／Ignition Field」

穴瀬 聖

2020年1月11日（土）から佐賀大学美術館にてはじまった展覧会「発生の場」では、鈴木淳、チェ・ヨンファン、福田篤夫、上村卓大の4人の作家が展示をしている。鈴木氏は映像や写真や磁器コレクションを使ったもの、体験型のものなど様々な素材やジャンルの作品を展示している。チェ氏は「共同体の中の個人」に焦点を当て、様々なデモの様子を素材とした作品を展示している。壁一面を使っての展示は作品のメッセージをより強調させるものになっていると感じる。福田氏は金箔や銀箔や漆と和紙を素材にした作品を展示している。暗めの展示室の中に隙間から自然光が入ることで、同じ作品の配列でありながら様々な表情を見ることができる。上村氏の作品で印象的なのは、自身のお子さんが作ったものをもとにのサイズ拡大制作されている作品だ。実際にお子さんが作ったものも展示されており、大きさの差を比較しながら鑑賞できるようになっている。

会場である美術館横のスペースでは、「発生の場」展示期間中の週末に「アートカフェ」を行っている。作品を見て思ったこと、感じたことを飲み物で一息しながら、ゆっくりと語り合える場作りをしている。アートカフェ内のガラス張りの壁面には、ビニールを張り感想やイラストを自由に書くことができる場所を設け、これまで展示を見た人やアートカフェに立ち寄った人との感想が共有できるようになっている。発生の場の展示受付でアートカフェについてのチラシを配布しているため、カフェに立ち寄ってくれる人も多い。大学の近くに住む方、遠くから夫婦でいらっしゃった方、大学で制作する学生や学生展示を見に来た親御さんなど、様々な層の方が訪れた。アートカフェ3日目に小学生が3人、展示会場とカフェを行き来していた。親に連れられて来たのではなく3人だけで来たようで、休日行く場所の選択肢に美術館があることがすごく新鮮で嬉しく感じた。展示についてどうだったか聞くと、いまいちピンと来てなかったようだが、カフェ内の壁面に好きなように絵を描いていて楽しそうだった。佐賀大学美術館が周辺の子ども達にとって、公園に行くような感覚で訪れてもらえるような場所になればいいなと感じた。

平日の午前中、発生の場の展示の受付をしていたところ、視覚障害者の男性が展示を見に来られた。白杖を持たれていたので気がついたが、これまで展覧会場で、見ることが不自由な人がいる場面に触れたことがなく、失礼ながら「見えにくい人・見えない人も美術館に来るんだ」と言う事実に対する驚きと、自分はどう対応すべきなのかわからず何もできずにいた。どれくらい見えるのか、そもそも受付の自分は見えているのか、声をかけるべきか、資料を渡してもいいのか、見えないのに渡しても失礼ではないか、と考え込んでいるうちに資料は渡せないまま、その方は展示室へ向かわれた。

男性は展示を一通りまわられてから、「すみません、今ここではどんな展示をしているんですか？」と私に声をかけてくださり、ここで初めて受付の私が見えていることに気づいた。私は展示をうまく説明できる自信がなかったが、作品の解説を申し出た。男性は視野が狭く弱視であること、ぼんやりとした視界であるが明暗はわかることなどを教えてくださった。

作品を説明しようとすると無意識に「見てわかる」ことを前提に話してしまうことに気づいた。どう伝えたらわかりやすい説明になるのか、自分も探りながら解説をした。それと、これは誰に対して解説をするときにも言えることだが、自分でちゃんと作品について理解していないと人に説明することが難しいということに改めて気付かされた。この時は資料があったのでなんとか一通り説明できたが、なかった場合はできていなかったと思うし勉強不足だったのを悔しく感じた。また、作家や作品の解説をしながら、この展覧会がSMAARTというプロジェクトの一環であること、自分は学生として関わっていることなどもお話しした。

男性から「これまでも何度か佐賀大学美術館に来て展示を見たことがあるが、展示内容がよくわからないまま帰っていた。今回初めて声をかけて解説をしてもらえて良かった」と言っていただき、拙い解説だったが役に立つことができとても嬉しく感じた。福田氏の作品の、銀箔の反射や立体感のおもしろさついての感想もいただいた。男性が美術館に入ってきたときに、すぐに自分から声をかけられなかったことを悔しく感じたが、展示がわからないまま帰らずに自分に声をかけてくださった男性に、自分からも感謝の気持ちでいっぱいになった。今回の体験を通して、自分の中での展覧会の見方と関わり方が変わったと思う。